

娘の視点から語る母の物語
—張愛玲『小団円』と伝記・散文との比較を通じて—

鈴木基子*

A Story of a Mother Told from the Perspective of a Daughter:
Eileen Chang's "Xiaotuanyuan" and an Analysis through a Comparison of Biography and Prose

SUZUKI Motoko

Abstract

The love affair and marriage of Rachel, modeled after the mother that appears in the novel "Xiaotuanyuan", as well as the featured mother-daughter relationship, were analyzed through a comparison between the biography and prose. This strongly suggested that many fictional events in this novel that deviate from facts are featured in the biography and prose. The daughter grew up from an early age without the presence of her mother. The daughter subsequently sustained psychological trauma from her mother's amorous adventures with men that can be characterized as romance addiction, as well as the mother's emotional outbursts.

This "biographical novel" was written in the United States when the author was 55 years of age and depicts the "emotional growth of the daughter" and the "revenge on the mother". It is a "story of a mother told from the perspective of a daughter".

Keywords : Eileen Chang, Xiaotuanyuan, Mother-daughter, romance, fiction

1. はじめに

1940年代の中国文壇に現れた張愛玲が、生涯最後の地—米国で書き上げた『小団円』が正式に台湾で出版されたのは2009年で、彼女の没後14年の歳月を経た後であった。『小団円』は、出版するとすぐベストセラーとなり、香港・台湾や中国大陸各地を席卷する超話題作となった。¹⁾しかし、張愛玲の遺作ともいえる『小団円』に対する評価は、毀誉褒貶が激しく一定せず、應鳳凰の張愛玲の文学史上の位置づけを変えるべきという主張さえ見られた。²⁾池上貞子は「感情論的に彼女がモデルとなった胡蘭成に対して恨みつらみをぶつけた、復讐したのだという意見も多い」、「自身の再構築を図ったもの（南方朔）」、「〈家の崩壊〉を描いた『長篇成長小説』（黄錦樹）」と批評の傾向を紹介している。³⁾近年、女性主義と精神分析からの研究も出現している。楊曼芬は「彼女を最も深く傷つけたのは、愛ではなく性である。張愛玲はついに長年抑圧された、潜在意識の奥底に隠蔽していた情愛内容を書き出した⁴⁾」と言う。また、石曉楓は「『小団円』に書かれたのは、その実、正に隔絶された彼女自身/性/愛の中で九莉が、親と異性への愛情に対する永遠の渴望と期待である⁵⁾」と言う。

『小団円』はヒロイン九莉が、大家族の中で、清朝の生き残り「遺少」の父と、常に不在で進歩的な母に戸惑い振り回され、おばに支えられて、恋愛と結婚、及び将来に悩んで成長していく物語である。張愛玲自身はこの作品が「愛情物語」であり、「愛情の千変万化」を描いたと述べている。⁶⁾全325頁に100名程の人物が登場し、

キーワード：張愛玲、『小団円』、母娘、恋愛、虚構

*平成25年度生 比較社会文化学専攻

ドロドロした男女関係と親族関係が大胆に繰り広げられ、これまでの彼女の作品のイメージと大きく異なる。特に、自分の産みの母をモデルにした蕊秋に対し、憎悪に満ちた描写がされている。産みの母親を貶す作品を公表したその心情は、何であったのであろうか。

本稿は、まず2冊の伝記⁷⁾と散文及び年譜⁸⁾から、母逸梵の出身と結婚及び恋愛を中心に生涯を整理し、母娘関係の変化をみる。それから『小団円』の記述との比較を通して、本人が語らない『小団円』執筆の意図を探究する。また、母と娘の記述に絞り、伝記と小説を比較することにより、虚構と事実の違いや、小説と伝記や散文との記述の違いを明らかにし、『小団円』がどのような小説であるのかを考える。

2. 伝記の母黄逸梵と娘張愛玲

2.1 黄逸梵の出生・結婚と張愛玲の幼少期（1896年～1930年）

黄逸梵は1896年に、名門長江水師提督黄翼升の息子を父とし、その妾から生まれた双子の姉である。逸梵の出生前に父は亡くなり、母も早世し正妻に育てられる。逸梵は1915年に張廷重と旧式結婚をし、1920年に長女愛玲を、1921年に長男子静を出産した。娘愛玲が生まれる頃から母は夫と不仲になる。逸梵は「勇敢な湖南人」で個性が強い。夫は清朝に忠節を尽くし中華民国に適應できなかった「遺少」で、天津では鉄道局で英語を活かし働いていたが辞め、妻の財産を使おうとしていた。母は夫の妹張茂淵と、娘が4歳から8歳までの4年間、英国に留学する。娘は大家族の中で乳母に育てられ、母の不在に何も不自由を感じなかった。⁹⁾ 帰国した母と暮らした洋館では西洋文化色の濃い大家族生活を送り、¹⁰⁾ 娘は母と英国に憧憬を感じ、9歳の時に将来は音楽家か芸術家になろうかと思案していた。¹¹⁾

2.2 黄逸梵の離婚から張愛玲の学童期と女学校時代（1930年夏～1937年秋冬）

1930年夏、10歳の愛玲は教会経営の黄氏小学6年生に編入し、翌年夏に卒業する。その年に母は弁護士を立てて廷重と離婚する。母は離婚後、単身、絵画を学びにフランスへ行く。愛玲は美しく敏感な母に「ロマンチックな愛」と「遙かに遠くて神秘的」¹²⁾なものを感じている。そして、愛玲は1931年の夏に、6年間寄宿制の聖マリア女学校に入学し、1937年夏17歳で高校を卒業する。当時、卒業したら、英国へアニメ映画を学びに行き、将来中国画の風格を、米国で広めたいと思っていた。¹³⁾ 1934年に父が再婚し継母が家に入り、彼女は悲しむ。週末に実家に戻って過ごし、初めの2年は、愛玲と継母との関係は悪くはなかったが、弟に暴力を振るう父に「いつの日か、復讐してやる」¹⁴⁾と思った。

女学校を卒業する1年前に、母は米国商人の男性と帰国する。母には娘の海外留学を実現させる目的があった。愛玲は留学を決意して、父と継母に話したが、反対され罵倒される。¹⁵⁾ 1937年8月末、戦火を逃れて、実母の家で2週間過ごし家に帰ると、暴行を受け折檻され、半年間監禁され病気になる。家は突然「疎遠にすべき狂人のいるような場所」¹⁶⁾となった。八一三抗戦が起これ、父は住友銀行勤務を辞職する。

2.3 黄逸梵との同居と張愛玲の求学期及び死別まで（1938年～1957年）

門番の隙を見て実家から脱出した愛玲は実母と約2年同居生活を送る。愛玲はユダヤ系英国人の家庭教師から留学の受験勉強を教わり、母から淑女教育を受ける。だが、母からお金をもらう時、母は不機嫌で、些細な事や耐え難い悪いことが重なり、段々と母への愛が壊れていく。¹⁷⁾ その際、母は娘への教育が、その犠牲に値するかどうかと考え、娘自身も懐疑的だった。¹⁸⁾ 娘は「母の家はもはや、優しく穏やかなものではなくなってしまった」¹⁹⁾と思うようになる。娘は1939年1月、ロンドン大学極東地区の留学試験に1番で合格する。だが、戦争のため同年8月末に香港大学へ入学したが、1941年末に日本軍の攻撃があり、2年学んだ後上海に戻る。1942年9月にセントジョン大学に編入したが卒業はしなかった。愛玲は小説を書いて原稿料で生活し、1944年夏に胡蘭成と「結婚」したが、数年で破綻した。母は、香港大学の古い知人の教員に娘の復学と奨学金の手配の手紙を書き、²⁰⁾ 愛玲は1952年夏に復学の手続きをする。だが、彼女が数カ月訪日したことが発覚し、大学の怒りを買ひ、問題となる。愛玲は香港アメリカ新聞社の仕事を始める。一方、母は1939年に米国商人とシンガポールで暮らしたが、後に彼は戦争に巻き込まれて亡くなる。その後、母はマレーシアを経てインドに行き、1946年に上海に戻り、1948年末に英国に

行く。母は、彼の遺した皮革を用い製品を販売したく、工場で製造技術を学ぶが成功せず、骨董を売って生活をする。母は逝去前に、米国在住の娘に会いたがったが、娘は会いに行かず、1957年に61歳で客死する。

3. 『小團圓』の母卞蕊秋と娘盛九莉

3.1 蕊秋の出生・結婚と九莉の幼少期

九莉の母である蕊秋の父は軍人家系の出身で、24歳の時、雲南省で瘴気にかかり亡くなる。当時、正妻に子どもはなく、2番目の妻が妊娠中であった。お腹の子が、亡くなった夫の子であると本家に信じてもらえず、大騒動となる。女子を出産したので、女中（凌嫂子）が機転を利かし、飢饉で避難してきた山東人の男子をもらい、籠に入れて連れて帰り、双子とした。²¹⁾ その女子が蕊秋で、九莉の母である。蕊秋の生母はふたりの子を育てた。

年頃になった蕊秋は縁談に乗り気でないが、乃徳の母に泣かれて、嫌々乃徳と結婚する。母蕊秋は、娘九莉と息子九林に恵まれるが、弟はイタリア人の音楽教師が父であることが暗示される。それから、母は、夫の妹楚娣と英国に留学し、外交官の簡煒、及び楚娣との三角関係になるが、彼は女子大生と結婚してしまう。九莉は母が好きで、小さい頃に描く母の絵は、常に誰よりも美しい。²²⁾ 蕊秋は栄養学の知識が豊富で、英語が話せ、美しく魅力がある。毎日高価な羊乳を滋養と若返りのために飲用している。

3.2 蕊秋の離婚と九莉の女学校時代

九莉は劉氏女学で学んだ後、寄宿制女学校に入る。母蕊秋は中国に帰国してから4年後に英国人の弁護士に依頼して、夫乃徳と協議離婚をし、九莉は喜ぶ。乃徳は、古典の暗誦、阿片・モルヒネの使用、妾との交際、買春、投機的売買、賭博に明け暮れ、家の財産を食いつぶし、「遺少」の生活を続けていた。母は離婚後、ひとりヨーロッパに旅立って行く。母は娘への手紙に、忙しさに不平を抱き、フランス語を学ぶ時間がなく、現地の美術クラブで塑像作りを学んでいると書く。

九莉が女学校在学中、父が再婚する。相手は、家柄が釣り合うが、心中未遂の過去を持つ、阿片を吸う晩婚の翠華だった。九莉が在学中、母が上海に一時帰国する。母は自分の美容と家族の健康に気を配る一面も見せる。16歳の時、九莉はそれまで習っていたピアノを止めて、アニメを描くことにする。九莉は将来外国に留学したいと強く思っていた。母に、中国人は若くて処女であれば誰の所へもお嫁に行けると言われ、小さい時から自立を教えられてきたのに、と疑問に思い、母の少女と処女の話の不潔に感じる。²³⁾ 卒業した夏のある日、戦争避難のため、母蕊秋のところへ滞在し、家に帰った娘九莉に、実父と継母翠華が暴力を振るい監禁する。父は日常的に弟にも暴力を振るっていた。父は離婚協議で承諾していた九莉の留学の希望を反故にする。

3.3 蕊秋との同居と「アフタヌーン・ティー」

実家での監禁から逃げ出した九莉は、実母と暮らすことになる。母が工面して1年間大学連合入試²⁴⁾の監督経験者を家庭教師に付けて勉強した結果、合格する。母からは日常生活の方法と淑女としての振る舞いも教えられる。この間、母に「少し馬鹿なところがあるし、あなたのような人が社会に出たいなんて」と言われて、恥ずかしさが頂点に達する。²⁵⁾ 母に叱られる度、九莉が弁解すると「いつも言い訳ばかり！」と言われて萎縮する。九莉は母への態度が不器用であるが、「母への負債」を返したいと何度も心の中で思う。

九莉は、はじめの頃、英文小説には母のような人が多いが、母は人と深い関係に陥りたいのではなく、好かれたいだけだと思っていた。後に、母が何度も墮胎をしたことをお婆から聞かされ、母は常に異性との深い関係に反対していたのにと、意外に思う。母の家に男性客が訪ねて「アフタヌーン・ティー」が始まると、娘は厚い英文書を持って屋上へ行った。蕊秋は、複数の親戚や外国人と肉体関係を持っていたことが九莉に推測されている。母は「アフタヌーン・ティー」の時は機嫌が良く、それができない時は九莉に当たり散らしていた。母の恋愛相手は、中国人の親戚に、英国軍官、同棲した勞以德、病理学の雷克、法科学生の菲力、英国教員の馬壽、フランス人軍官、医師など10数人にのぼる。

ヨーロッパで戦争が起こったので、九莉が英国の代わりに、香港のヴィクトリア大学へ入学していた時、母が九莉を訪ねる。九莉が安竹斯先生からもらった個人奨学金について、母は先生との関係を疑い、九莉が母にそれ

を渡すと、母はすぐ賭け事で使い果たしてしまった。九莉は母に失望し、母に対し極度に冷淡になる。だが、母が海水浴場に来た時に、母はもう九莉の振る舞いを注意しなくなり、九莉は母が自分のことを諦めたと思い、絶望する。九莉は母への感情が一定せず、時に矛盾した気持ちを感じる。香港で戦争に巻き込まれ死にそうになった時は、母のことが全く思い浮かばない。母に愛されたい気持ちと、状況によっては母を気に掛けない気持ちが混在する。戦争勃発のため、九莉は大学の途中で上海に戻った。そして邵之雍と「結婚」したが、彼の派手な女性関係に振り回され、自ら去る。九莉は自殺したいほど母と邵に追い込まれていた。母に浴室で身体を覗き見され、不愉快でもあった。小説を書きお金を貯めた娘は「二兩金子」相当の多額のお金を渡すが、母は「虎は残忍だが自分の子を食べない」ときっぱりと拒否し、娘はいぶかしく思った。

母蕊秋は、シンガポールに行き、英国人の恋人勞以德と同棲するが、彼は亡くなる。母はマレーシアを経てインドに行った。母は上海に戻っていた九莉に、手紙を書いて、香港の大学に戻るよう催促する。九莉は昔、オックスフォードの大学院に行けると言われていた夢が消えてしまった。²⁶⁾ 香港に戻り大学の勉学をする気はなく著述を継続したいと母に伝えるが、「井戸の中の蛙」と言われてしまう。²⁷⁾ 娘は自分の夢が母に認められない。

戦後に香港から渡米後、九莉は「ずっと子供は要らないと思っていた。— (略) —私の産んだ子どもが、私の母の代わりに、私に復讐するから」²⁸⁾ と、米国人男性との間にできた子どもを、墮胎し結婚する。母は臨終の時に娘に会いたがったが、娘は行かなかった。

4. 伝記・散文と小説『小団円』の記述の比較分析

4.1 伝記・散文と『小団円』の共通点と相違点

清秋子と閔紅の伝記と、張愛玲の散文と小説の両者に共通して書かれた母と娘を取り巻く事柄は、母の出生と旧式結婚、母の留学と不在、父母との蜜月期、両親の離婚、母の渡欧、父の再婚と継母、実父と継母からの娘の監禁、娘の実家からの脱出、母の一時帰国、母と娘との同居、娘の留学準備と淑女教育、娘の香港の大学への留学、母の再渡欧、娘の「結婚」、娘の出産拒否と国際結婚、母の客死などである。小説は、伝記・散文と、大きな人生の流れとしてはほぼ一致している。それが「伝記的小説」と言われる理由であろう。

だが、細かいところでは、相違点が多く存在する。全体的に、『小団円』には具体的な年月と年齢、及び移動の時期と場所があまり明確に書かれておらず²⁹⁾、人名もすべてが虚構である。ここでは、恋愛と結婚、それに母娘に関する代表的なものを分析する。

母の出生と結婚の一例を挙げる。まず、母の出生について伝記も小説も、娘の生母は妾であり、出産前に、夫が死亡していたので、男子が家の継承に必要だったという事情が共通する。伝記では、妾が女子を産み失望された直後に、男子が産まれ歓喜され、妾は出産後まもなく亡くなり、双子は正妻に育てられたと書く。³⁰⁾ 一方小説では、妾が女子を生んだので、女中（凌嫂子）が機転を利かせて、山東の飢饉を逃れて避難してきた人の男子をもらい双子にしたと書く。小説では、夫の死から妾の出産までの騒動が詳細に描かれる。

母の結婚については、伝記では縁談相手先の夫の母（李鞠耦）が亡くなって3年後であったが、小説では、嫁ぎ先の夫の母に泣かれて仕方なく結婚した³¹⁾ とある。これも旧社会での旧式結婚では本人の意志より両親の決定権が強かったことを強調する意味があろう。

4.2 小説で省略されたもの

伝記には書かれているが、小説では省略された内容を、母と娘について追ってみる。

まず、母の留学目的は、伝記では婚姻時には夫の妹楚娣の監護で、離婚後も絵画を学びに渡仏したとあり、小説では、渡欧のことは書かれるが目的が不明瞭である。次に母の仕事については、伝記では、1948年にマレーシア華僑学校で半年教鞭を執った記載があり、その後ロンドンに定住し、恋人の後を継いで英国の工場で働いていた、とある。だが、小説では母の教職歴と工場勤務には触れていない。インドでネールの姉妹の社交秘書をしたことは両方に書く。伝記で、母は娘が香港の大学に復学できるように、大学の教員の知人に手紙を書き、奨学金の手配に手を尽くしたことも、³²⁾ 小説では触れられていない。

娘については、名門女学校の概要とそこでの文才と創作歴、具体的な留学の夢、ロンドン大学留学のテストに

1番で合格したことが小説に書かれていない。また、香港から上海に戻りセントジョン大学に編入したこと、香港の大学に復学した時の経緯と日本訪問のこと、共産党のスパイの嫌疑をかけられたこと、香港アメリカ新聞処での仕事も書かれていない。更に、渡米後の米国人の夫との詳しい生活、米国各地を転々とした居住先の生活、なども³³⁾小説では書かれていない。愛玲は「香港大学は私の第一希望ではなかった。—(略)—大学へ戻るのを放棄して、母を大いに失望させた」³⁴⁾と晩年に述べる。彼女は元々ロンドン大学志望で、実母が自己中心的に物事を進めたことに対する不満も一因であろう。現実には張愛玲は香港で復学を果たしていたが、継続できなかった事情があり、小説ではそこを省略し、香港に戻らなかったと書く。³⁵⁾

更に、父の天津での仕事内容と上海での1933年から1937年までの住友銀行勤務、それに高利貸などの職歴が小説では書かれていない。父による監禁、財産など父親に関する事が、小説では、伝記・散文ほど具体的に描かれていない。小説で九莉は父を愛していないと言う。そして、散文で娘愛玲は父の家について「あそこのすべてを軽蔑する」「父に属するものは必ず悪いものである」³⁶⁾と述べる。張愛玲が子ども心に、古い世界の父よりも、新しい世界の実母の方に愛情を抱いていたのは事実であろう。

これらのことを『小団円』に書かなかったのは、自慢を回避する謙虚な気持ちの表れかもしれないし、社会通念として認められぬ恥やミスを隠蔽し、保身をはかるためかもしれない。そもそも小説の重点が男女の愛にあるので、張愛玲が省略した可能性が充分あるであろう。小説では、父の職歴に言及しないことで、漢奸の誤解を受けけるのを回避する他³⁷⁾、彼に生計を管理する経済能力がなかったことがより明確に示され、母の留学目的と職歴にほとんど言及しないことで、仕事が短期で、留学が遊びか現実逃避のためであったことがより強く暗示されていると言えよう。激動の時代であったが、ともに両親の能力に限界があり、それが、子どもに愛情形成への影響を与えたことを際立たせる。

4.3 虚構で創作したもの

次に、伝記には書かれなかったが、小説に描かれた内容を見てみる。

母の異性関係について、小説では、英国商人の恋人とシンガポールで、1、2年同棲した後、彼が戦争の影響で亡くなったことが描かれるが、これは伝記と年譜では、微妙である。³⁸⁾伝記を見る限りでは、他の異性は出現していない。1948年に母逸梵は彼の遺産整理をするために渡英しており、母がその亡き恋人を長年愛していた可能性すら推察できよう。

一方、小説『小団円』は母の異性関係をかなり派手に描写している。母蕊秋は意に沿わない旧式結婚をし、一女一男を産むが、婚外子の弟を出産し、子育てを乳母に任せて留学し、留学先で恋愛をし、三角関係に陥り墮胎をした。親戚とも不倫をし、離婚後多くの外国人相手に国内外で、恋愛依存のように10数名の男性と派手な交際を繰り返す。³⁹⁾

恋愛以外の母は、他人のことはどんなことでも悪く考える性格で⁴⁰⁾、娘の香港の大学の個人的奨学金800香港ドルを賭け事で使い果たしたこと⁴¹⁾、香港でスパイと間違われ、家宅捜索を受けた事⁴²⁾、英語を活かして一時的に赤十字で働いたこと⁴³⁾、などが書かれる。母は娘だけでなくおばにも感情を爆発させたこと⁴⁴⁾、晩年権勢や利益に取り入り、性格が変わってしまったこと⁴⁵⁾、も挙げられる。あまり良くないことが多く、伝記に描かれる事実を変更したり、追加補充して小説に組み込んでいる。継母については、貧しくて親が認めぬ「いとこ同士の愛」⁴⁶⁾で心中未遂の生き残りである阿片を吸う晩婚者と『小団円』で書くが、伝記には継母の過去に心中未遂事件は書かれていない。

このように大幅に加筆することにより、実母と継母への不満が強調され、ふたりの母親を貶める効果が明確になる。中国社会では伝統的に孝が重視され、母親の恥ずべき私生活を公表することは、旧倫理を否定する、扇情的で挑発的な小説と読者に印象を与えよう。

4.4 娘の眼から見た母親像

『小団円』では、娘は母を通して結婚・恋愛について学習する。日頃母から異性と深い関係を持つてはいけないと言われていた娘だったが、徐々に、母の「アフタヌーン・ティー」の様子からすべてを理解するようになる。母は中国人は恋愛がわからない、「だから外国人を愛したことのある人は、もう二度と中国人を愛せなくなると

言っている人がいる]⁴⁷⁾と言う。また、ある時は「女性が年を重ねていくと、男性はあなたをただ性の対象としてしか関心を持たない」⁴⁸⁾と断言する。娘は飛び降り自殺して母に見せつけたいと思ったこともあるが、「色恋沙汰の罪人」⁴⁹⁾の母に悲哀と同情を感じている。母蕊秋は年頃の娘に結婚か自立かの選択を迫り、中国の古い価値観を娘に教示するが、最終判断は娘の決断に任せる。そのため、白水紀子は、この時代に「母による支配」「母が娘や嫁を抑圧する女性間抑圧」⁵⁰⁾が見られたと言うが、九莉と蕊秋の場合は、放任することで、かえって抑圧しているように思われる。娘が病気になる、母の好きな「アフタヌーン・ティー」ができない時は、感情を爆発させて「お前のような人は自生自滅あるのみ」⁵¹⁾とヒステリックに怒鳴り散らし、それを娘は呪いを聞くように耐え、感情を押し殺した。

伝記の母逸梵は旧式結婚の殻を破り外国に出て、短期の職を持ち、成功しなかったものの、英国で自立を図ったこと、米国人恋人（事実は英国人）が亡くなった後も愛していた可能性や、娘の教育への熱意と日常生活への気遣い、こうしたエピソードには、時代の先取り精神と「愛さえあれば」⁵²⁾という信念が顕著に表れている。それらの伝記的事実をあえて隠蔽し、『小団円』では激しい男性遍歴をし、束の間の愛を享受し、娘を放任し、強く抑圧して傷つけるように書き換えた。伝記・散文とも幼少期に張愛玲と母逸梵との間には良好な関係もあり、愛玲は母逸梵を憧憬してもいたのだが、小説では、故意に一部を誇張して、虚構を交え、母蕊秋を故意に貶める意図があるように感じられる。

5. 『小団円』の描く母娘と中国近代文学

5.1 中国近代文学における母の規範と母娘関係

清末は「女子教育の目的とは良妻賢母の育成か、それとも国民の母、あるいは女性革命家の養成かということが論争の焦点となりえた」⁵³⁾時代である。五四時期の中国文学に描かれた女性像は、伝統的な倫理道德を守る女性、困難に立ち向かう女性、抑圧された可哀想な女性であろう。ところが、興味深いことに、白水紀子は、「これまで中国文学は、一方で慈愛・犠牲・忍従などの言葉で修飾された慈母の像を描くことで『母の神話』を作り出しながら、同時にこのイメージとはおよそかけ離れた悪魔に変わった母を繰り返して描くことで、『母の神話』の解体が行われてきた」⁵⁴⁾と述べる。張愛玲は、五四文化革命から25年経って登場した作家である。顧蕾は、張愛玲の亡命前の作品における母娘関係の描写は、「全作品には慈母と言える人物が見当たらない」⁵⁵⁾と指摘する。邵迎建は実在の母について「母は非常に勇気のある女性で、纏足で『2つの時代と東西の世界をまたいだ』」と述べ、「乳児の時から常に不在だった母親の像は永遠につかむことのできない『透明』で、『一種の原始的な悲しみ』を帯びるメロディーと化し、張愛玲文学のバックミュージックになり、字と字、行と行の余白に流れ、張愛玲文学の基調となった」と言う。⁵⁶⁾張の作品に現実の母の存在の影響が見られるのである。許子東は、『小団円』は五四以来の多くの愛情小説とはつきり異なる男女関係、さらに近代文学で珍しい母娘関係を描いたところに文学的意義があると述べる。⁵⁷⁾

『小団円』に描かれる母蕊秋は五四文化革命の影響を強く受けたが成功せず、遺産のアパートと貴金属装飾品・骨董売りと、中国の家と内外の恋愛相手たちから得たであろう金銭に依存した生活を送っていた。母は苦しい中で娘を気遣い、教育を与え、留学に導く。だが、派手な男性遍歴と時折見せる感情爆発が、娘の心を傷つけていた。

母は、時代の最先端を行く新女性の側面と、無意識に娘を抑圧して傷つける側面を持つ。儒教文化では、性に関する事を表明するのはタブーだが、母の行動は極めて解放的である。母が娘に平素語ることで、自らの言動は矛盾している。母の心の葛藤と努力、娘への愛情は、娘にはほとんど評価されず、母は娘に見限られ、最期は見捨てられ、娘は母に復讐を果たす。娘九莉の視点からは、母は「慈母」ではなく、娘を傷つけた「悪魔」であり、亡命以前の作品と同様、白水の言う「母の神話」の解体が描かれていると言えよう。張愛玲は五四時期の作家と世代も時代も異なるが、五四新文学の系譜上にあり、影響を受けている。同時に、蕊秋は経済的に自立できる能力を持ち、名家出身だが伝統的な性倫理に縛られない新女性の側面も具え、伝統的な女性を超越した極めて特殊な新旧の両義性を持つ複雑な中国女性像であると言える。

5.2 『小団円』の母と娘の背景

では、なぜ両義的な母親像が描かれたのか、『小団円』の母娘の背景について考える。家の継承について、母蕊秋は前述したとおり、父の血統を受け継いで生まれたが、女子であったので、家から出なければならず、外から男子を迎えたことによって、生き延びることができた。娘九莉の家は名門の資産家であったが、父が没落させた。小説も伝記も、娘は子どもを米国で墮胎して結婚し、小説ではその子は家の継承権を持つ男子であった。⁵⁸⁾再婚した父と継母には望んだ子どもを持たせず、残酷で皮肉を込めた描写すら見られる。

母蕊秋は、「今は男女平等」と時代の変化を肌で感じているが、娘九莉は明言しない。母は長男である弟九林にはあまり手をかけず、姉九莉の方に愛情を注いで熱心に教育した。張愛玲は散文に「私は（乳母から）男尊女卑の論調を聞いて、我慢できず、いつも言い争った—（略）—早くから男女平等の問題について考えさせられ、しっかりして必ず弟に勝たねばと思うようになった」⁵⁹⁾と書く。張愛玲が幼少期から実感してきた、家の継承に男女差が存在することに対する不満が、このような形で小説の内容に反映されているのであろう。しつこく、過剰に男子による継承への批判と嫌悪が描かれている。

小説中の母蕊秋は恋愛依存のように、多くの男性と恋愛関係になる。恋愛依存とは、「いつも報われない愛を繰り返してしまったり、いつも誰かを愛するプロセスに身をおかないと心が満たされない、むなしくて仕方がない」⁶⁰⁾心理状態を言うが、彼女の心には常に見捨てられることへの恐れがあったのではなかろうか。母の男性遍歴の姿は、娘九莉の夫邵之雍（モデルは胡蘭成）の女性遍歴の派手さに重ねられ、異性遍歴への嫌悪が小説に影響したと考えられよう。母も娘も結婚破綻の一因が、夫の異性関係にあるので、報復と言えよう。九莉は母の不倫は、少し報復の意味があったのではないかと回想している。⁶¹⁾伝記には母の不倫と派手な異性関係の記述はない。

娘九莉は、実母と継母及び父から身体的虐待と心理的虐待を受けた。不自然で不適切な養育が行われていたと言えよう。そして、成人後は邵之雍と燕山との「結婚」と恋愛に敗れた。それらが素直な愛情への障害となり、娘の性格と言動が形成されたと言えよう。

母蕊秋は、蕊秋が生まれる前に実父が亡くなっており、血縁のない弟との特殊な家庭で生まれ育ち、旧式結婚と外国での中国人との初恋に失敗し、英国人の恋人は亡くなった。母は、出生と結婚と愛に恵まれず、見捨てられるのを恐れ、恋愛依存のように「愛さえあれば」と束の間の愛を求め続ける。だが、外向的で娘に放任の抑圧をし、満たされぬ思いを複数の中国人や外国人男性を相手に発散し、報われぬ愛を追う結果となった。母も娘と性格は違うが、愛情への障害があった点は共通する。母娘とも中国旧社会の伝統に反発し、西洋の新世界への逃避と自立の希求を行ったが、母は自分の人生を優先させ娘を傷つけ、娘は母に幻滅し憎んで復讐した。蕊秋は「娘によって語られる母」⁶²⁾なのである。許子東は、「女主人公（九莉）は一生多くの女性と共に邵之雍を奪い合い、又、多くの男性と共に母を奪い合う。簡単にいえば、『小団円』の母のイメージは、作家の極めて過酷な“母を断罪するコンプレックス”（审美情结）の表れである」と言い、「張愛玲の描く母親は、纏足を解放した足で水着を着て中国骨董を携えて海外を漂流し、西洋の個性（女性）解放を探求した、美しくも不幸な女性であり、彼女のロマンチックな感性と金銭に対する現実感、娘に伝承した」⁶³⁾と語り、筆者も同感である。

6. おわりに

『小団円』は、中国の没落した名家に生まれた張愛玲が、幼少期から距離があった母の結婚と恋愛を冷静に観察し、読みごたえのある作品にして、一気に中国語で書き上げた人生最後の長編小説である。張愛玲はこの虚構の「伝記的小説」を通して、産みの母との感情のすれ違いや、母親不信、長年心の奥に秘めていた鬱憤と不満を暴露したのである。

伝記・散文と小説との比較から『小団円』に表れる母蕊秋の結婚と恋愛観、それに母娘関係を論じてきた。娘九莉は、両親、継母、夫、戦争と何重もの苦しみの鎖に縛られ振り回された人生であった。特に母蕊秋は、九莉に大きな心的外傷を与えた元凶であり、実母も継母も小説で伝記・散文を超え、貶められていた。母娘関係が、憧憬から葛藤、同情、幻滅へと変化し、九莉がたどり着いた結論は、「男性中心主義への反発と子孫拒否」「結婚の失敗が原因の男性憎悪」「異性遍歴を繰り返す生き方の拒絶」であったように思われる。小説の母は伝記・散

文の母と比べて、愛よりも憎しみの方が刺激的に大きく描かれていた。それは母娘不信の末に、愛した人に期待した愛を得られなかった娘の愛情倒錯の反映であるのかもしれない。

小説では母に幻滅して復讐したように見えるが、現実には1994年出版の写真伝記集『対照記』には美しい母の写真が単独で7枚も収録されている。母に対する敬愛の念は依然として健在であり、小説でも母の美しさに度々言及している。その反面、胡蘭成とReyherのふたりの夫の写真は1枚もない。1975年執筆の『小団円』と1994年の『対照記』の母の記述の相違は、虚構の小説と写真伝記集の違いであるのか、それとも加齢による心情変化なのか、或いは倒錯した愛情の表れなのであろうか。愛する人から期待していた愛が得られない時に、深く傷つくが、本来は深く愛していた母への愛が倒錯して、母を貶める表現に突出し、変形して表れたのかもしれない、とも考えられる。だがそれは、あくまで張愛玲が亡命先の米国での初老期55歳頃の精神状態での人生総括であろう。『小団円』を執筆した当時の亡命先の米国での生活と初老期の精神状態が、創作に与えた影響も考慮する必要があるが、それは今後の課題としたい。

母と娘は、生きる時代と性格が異なり、一見違う生き方をしているようであるが、その実、ふたりとも成長過程に問題があり、愛情への障害を持ったことと、中国旧社会を出て西洋新世界で放浪したことが共通し、母と娘の生き方は根本的に同類であると言えよう。

本来は母に愛情を感じていた張愛玲が、故意に儒教のタブーである性を派手に描写し、母に悪いイメージを持たせることで、娘が母に依存せずに自立する扇情的で刺激的な「成長小説」「復讐小説」として虚構化したのであろう。つまり、『小団円』に見る母娘は、パラレル（並行）な関係にあり「娘の視点から語る母の結婚と恋愛の物語」である。同時に、五四小説の影響を受けながらも、母の特殊な男女関係と複雑な母娘関係を描いた「伝記的虚構小説」の特徴をもつ小説であると言えよう。

【註】

- 1) 泉京鹿「『一族』と『家』の重さ、ささやかな幸せ」朝日新聞2009年6月8日、グローブ（GLOBE）17号、北京の書店から、http://globe.asahi.com/bestseller/090608/01_01.html、<http://database.asahi.com/library2/topic/t-detail.php>。
- 2) 應鳳凰「張愛玲『小團圓』毀譽參半—《小團圓》印證了張愛玲作品的文學屬性：她是頭號鴛鴦蝴蝶派作家」『明報月刊』2009年4月、p111-112。
- 3) 池上貞子「張愛玲の遺作『小團圓』の出版から」、初出『東方』342号、2009年8月。『張愛玲 愛と生と文学』東方書店、2011年3月初版、p346。
- 4) 楊曼芬『矛盾的愉悅：張愛玲上海關鍵十年揭秘』秀威資訊科技股份有限公司、2015年1月、p302。
- 5) 石曉楓「隔絶の身體/性/愛—從『小團圓』中的九莉談起」『成大中文學報』37號、2012年6月、p221。
- 6) 宋以朗「『小團圓』前言」張愛玲『小團圓』張愛玲典藏8、皇冠文化出版有限公司、初版6刷、2009年3月。1976年1月25日 p6、1976年4月22日 p10。以下、張愛玲『小團圓』を『小團圓』、または小説と記す。
- 7) 清秋子『愛恨傾城小團圓：張愛玲の私人生活史：《小團圓》出版后第一部張愛玲全傳』京華出版社、2009年4月。2009年に『小團圓』が出版されてから大陸初の張愛玲の全伝記であり、境遇と愛情及び晩年の状況に詳しい。伝記の实在人物に、部分的に『小團圓』の内容を当てはめているところがある。閻紅『死生契闊 張愛玲—以及她愛過的那些人』聯合文學出版社股份有限公司、2011年1月初版。台湾で出版され、張愛玲の周辺的重要人物を詳述し、彼女が人物像と人格を形成していく過程を明らかにする。以下、出典を清秋子伝記、閻紅伝記と記す。ただし、伝記・散文については、それぞれの作者のバイアス（偏見・先入観）がかかっており、記載されたものが完全な事実でないこともある点を意識した上である。
- 8) 張惠苑編『張愛玲年譜』天津人民出版社、2014年1月。以下、年譜と記す。
- 9) 張愛玲「私語」『【散文卷一】1939—47年作品』張愛玲典藏全集8、皇冠文化出版、2001年4月、p174。
- 10) 「私語」、p177。
- 11) 張愛玲「天才夢」『【散文卷一】1939—47年作品』張愛玲典藏全集8、皇冠文化出版、2001年4月、p6。
- 12) 張愛玲「童言無忌」『【散文卷一】1939—47年作品』張愛玲典藏全集8、皇冠文化出版、2001年4月、p68-69。
- 13) 「私語」、p179。
- 14) 「童言無忌」、p76。
- 15) 「私語」、p180-181。
- 16) 「私語」、p182。

- 17) 「童言無忌」、p69。
- 18) 「私語」、p184。
- 19) 「私語」、p185。
- 20) 清秋子伝記、p259。
- 21) 『小團圓』、p39。
- 22) 『小團圓』、p89。
- 23) 『小團圓』 p137-138。
- 24) 『小團圓』 p19。オックスフォード・ケンブリッジ・ロンドンの3つの大学の連合入試を指す。清秋子伝記 (p62) と閩紅伝記 (p76)、年譜 (p31) とも、ロンドン大学極東地区入学試験に1番で合格と書く。
- 25) 『小團圓』、p134。
- 26) 『小團圓』、p245。
- 27) 『小團圓』、p259。
- 28) 『小團圓』、p324-325。
- 29) 例えば、母は離婚後、清秋子 (p28) と閩紅 (p60) の伝記ではフランスへ行ったが、小説 (p94) ではヨーロッパに行ったと書く。娘の留学目的は、散文ではアニメ映画で英国と米国を希望しているが、小説では、アニメの可能性があるが (p137) 明確ではなく、ヴィクトリア大学で学んだのは文系である。(p59) 小説の香港の地名は具体的だが、邵之雍に関しては南京、華中、上海などである。九莉が訪ねた邵の逃亡先は伝記と年譜 (p66) では温州であるが、小説 (p261) では「小城」(小さな町) と書く。
- 30) 閩紅伝記、p53。清秋子伝記、p12-13。
- 31) 『小團圓』、p143-144。
- 32) 清秋子伝記、p259。
- 33) 拙文「米国移住初期の張愛玲に関する一考察—1955年から1966年までを中心に—」『研究紀要』日本大学経済学部、第69号、2012年1月。拙文「張愛玲書簡に見る米国での生活実態とその人生観—1963年から1995年までを中心に—」『研究紀要』日本大学経済学部、第66号、2011年1月。
- 34) 張愛玲「対照記」『【散文卷二】1952年以後作品』張愛玲典藏全集9、皇冠文化出版、2001年4月、p64。
- 35) 『小團圓』、p259。
- 36) 「私語」、p179。
- 37) 父は、対日協力と誤解されないように、自ら住友銀行を辞職した愛国主義の側面もあった。清秋子伝記 (p94) 閩紅伝記 (p51)、年譜 (p20、p29)。父の描写も小説と伝記では落差がある。
- 38) 小説 (p40、p77) は、彼勞以徳は英国の恋人のようで、清秋子 (p49、p58) と閩紅 (p76) の伝記は「美国男友」と書く。年譜 (p26) は、弟の張子静は、彼は米国人「男朋友」であると言い、李開第は、彼Mr.Wagstaffは米国人ではなく英国人であり、張愛玲の母の「情人」(恋人)ではなく、彼と逸梵は上海で同居したことがないと言う。
- 39) 『小團圓』、p35、p135、p143-144、p149、p193-195、p282、p292など。
- 40) 『小團圓』、p34。
- 41) 『小團圓』、p30-32。
- 42) 『小團圓』、p44。スパイの嫌疑をかけられたのは、張愛玲という説がある。清秋子伝記、p260。年譜、p81-82。
- 43) 『小團圓』、p128。
- 44) 『小團圓』、p141。
- 45) 『小團圓』、p292、p294。
- 46) 『小團圓』、p107、p156。清秋子伝記、p33。閩紅伝記、p60-61。
中国旧社会で、倫理または遺伝学の理由から、いとこととの恋愛と結婚を禁忌とする慣習をもつ所がある。
- 47) 『小團圓』、p128、p236。
- 48) 『小團圓』、p282。
- 49) 『小團圓』、p288-289。原文は「風流罪人」。
- 50) 白水紀子「序章 中国女性の二つのイメージ」『中国女性の20世紀—近現代家父長制研究』明石書店、2001年4月、p9。
- 51) 『小團圓』、p149、p195。
- 52) 拙文「張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚—ヒロイン九莉を中心に—」『研究紀要』日本大学経済学部、第76号、2014年10月、p20-21。拙文「張愛玲『小團圓』楚娣の恋愛—モデル張茂淵の伝記との比較を通して—」『研究紀要』第77号、2015年1月、p134-135。
九莉とおば楚娣の生き方に「愛さえあれば」がある。
- 53) 藤井省三監修、清水賢一郎、星野幸代訳、夏曉虹著『纏足をほどいた女たち』朝日選書603、朝日新聞社、1998年6月、p12-13。
- 54) 白水紀子「第三章『母の神話』の解体」『中国女性の20世紀—近現代家父長制研究』、p87。

鈴木 娘の視点から語る母の物語

- 55) 顧蕾『张爱玲与林芙美子的比较研究：解读作品中的母女关系』外语教学与研究出版社、2010年6月、p151。
- 56) 邵迎建『伝奇文学と流言人生—1940年代上海・張愛玲の文学』御茶の水書房、2002年10月、p48。
- 57) 许子东『『小团圆』中的母女关系』『新文学史料』CNKI、2011年1期、p20。
- 58) 『小團圓』p180。清秋子伝記、p292-293。閻紅伝記、p221-223。年譜、p94。
- 59) 「私語」、174。
- 60) ピア・メロディ&ミラー&ミラー、水澤都加佐訳『恋愛依存症の心理分析』大和書房、2001年2月、2005年6月第5刷、p2。
- 61) 『小團圓』、p196。
- 62) 水田宗子「娘による母物語から母による母物語へ—近代文学の中の母と娘」水田宗子、北田幸恵、長谷川啓編著『母と娘のフェミニズム』田畑書店、1996年12月。「娘の語る母」、p126を参照した。
- 63) 许子东『『小团圆』中的母女关系』、p27。